【研究課題】
行政解剖例に適した骨髄組織標本作製法の検討

研究期間：２０２０年４月１日～２０２１年３月３１日

行政解剖例 2 例に対し、骨髄の採取、保存を行い、病理組織標本作製過程において脱灰液に複数の条件を設定して標本作製を行った。脱灰液は、10%EDTA・2NA 液（キレート剤）、プランクリュクロ脱灰液（塩酸＋ギ酸）、K-CX 液（塩酸）、2 倍希釈 K-CX 液の 4 種類を用い、脱灰時間・温度はそれぞれ 2 週間（常温）、7 時間（室温）、7 時間（室温）、24 時間（冷蔵）とした。脱灰処理後、組織切片を作製し、HE 染色、ギムザ染色、免疫染色（CD3、CD45、CD68、L26、MPO）を行い、染色結果の検討を行った。

結果、EDTA 液では、免疫染色（L26）を除き、良い染色性が得られた。プランクリュクロ脱灰液では、どの染色においても、EDTA 液や K-CX 液と比較し、染色性が低下する傾向が見られた。K-CX 液では、どの染色においても EDTA 液と同等の染色性が得られ、また免疫染色（L26）においては EDTA 液よりも良い染色性が得られた。しかし、K-CX 液においては、低濃度、長時間、低温度の条件で染色性が低下することも確認できた。これらの結果から、脱灰処理が必要となる組織において、適切に K-CX 液を用いることで、限られた標本作製期間で短時間に、そして染色性を損なうことなく病理組織標本作製を行うことができると考えられた。